

7．点検評価と課題

昨年度に引き続き外国人運営顧問 Anthony J. Stace 教授（Physical Chemistry, Univ. Nottingham, UK）と Jean-Pierre Sauvage 教授（French Academy of Science, France）によって研究活動評価を実施していただき、また新たに Graham Fleming 教授（Univ. California, Berkeley, USA）と柳田敏雄特任教授（阪大）に研究顧問をお願いし、所全体の研究評価、研究体制についての提言をいただいた。

外国人運営顧問 Anthony J. Stace 教授と Jean-Pierre Sauvage 教授による、理論・計算分子科学研究領域の全グループ、また物質分子科学研究領域と生命・錯体分子科学研究領域の一部のグループの研究評価が、平成 23 年 1 月に数日間 にわたって行われ、その評価レポート、また分子科学研究所全体のあり方についての提言をいただいた（以下のページに掲載）。特に、理論・計算分子科学研究領域は世界的にみても最大規模であり、分子科学の重要な範囲をほとんどカバーしており、各グループの研究が非常に優れていること、またヒヤリングを受けた実験グループが世界レベルのユニークな研究を行っていることなど、研究面での高い評価をいただいた一方、院生やポスドクの数が少なく、研究室サイズが小さ過ぎること、また所外との共同研究は盛んではあるが所内の研究グループ間の共同研究が十分でないことなど、所全体としての問題点の指摘を受けた。

その対策の一環として、従来のポスドク制度（IMS フェロー）をより柔軟に運用する一方、新たに特任助教制度を導入してきている。また、京都大学、名古屋大学、名古屋工業大学との学生の交流会や、新しい大学院制度の検討などを行っている。また、所内で交流の場を増やすために、研究所コロキウム、所長招聘研究会を活性化し、その後の検討・交流会の実施などを行ってきた。国際性の向上のため、従来、インド、韓国などとの研究交流が盛んであったものを再度活性化し、また、欧米のいくつかの拠点大学・研究所との研究協力を深めていく予定である。

また、研究顧問 Graham Fleming 教授による研究・組織評価が、平成 22 年 12 月に 4 日間にわたって行われ、所全体の研究のヒヤリングによる各研究領域の研究レベル評価、また改善の方向性についてのアドバイスを受けた。分子科学研究所が目指すべき新しい研究の方向性や、その実施のための組織化等についての提言を受けた。

分子科学研究所では、これからの研究の 2 つの柱「エクストリーム状態の分子科学」と「ポストナノサイエンス（分子システム研究）」を設定し、その具体的なアクションプランの作成を行い、またそれらを実行するための研究グループのあり方について検討を行っている。

上記の評価以外に、毎年 1 月末に、全グループリーダー（教授および准教授）による研究検討会を実施し、分子科学研究所における研究内容のヒヤリングを行っている。

（大峯 巖）